NPO 法人岡崎がくどうの会

第 48 回全国学童保育指導員学校･西日本･愛知会場（20230604）レポート

【クラブ】（あそびばクラブ）
【名　前】（島田歩実）

①午後に参加した講座のタイトルをお書きください。

（理論）講座（№6）　（子どもの生活とインターネット）

※全体講座のみに参加された方は、全体講座のタイトルをお書きください。№と選んだ理由は必要ありません。

②この講座を選んだ理由をお書きください。

子どもたちから「はぁ～オレは家でゲームがやりたかったんだよ」「なんで学童にはゲーム持ってきちゃいけないの？」「今日も帰ったら〇〇君とゲームする」「昨日も夜中まで通話してたよ」等、本当にたくさんこのような言葉をききます。子どもたちの生活の中の楽しみでもあり、なくてはならないものになっているのであろうなというネットの世界。子どもたちがここまでのめりこむ、“ネットの世界”にはどんな魅力や現状があるのかなと気になり、学びたかったので選ばせて頂きました。

③本日の講座で心にのこったことや気づいたことや学んだこと、今後の実践に活かしていきたいことなど、感想もふくめてお書きください（自由記述）。

今年度の指導員学校も、様々なことを学ばせて頂きとても自分にとって実りのある時間でした。

午前中の学び。基調報告で江坂さんが仰っていた「子どもたちの“居場所”というものが今なくなりつつある」「今まで築きあげてきた“子どもが学童保育で育つという良さ”をまずは指導員と保護者が確信していないといけない」というお言葉が特に心に残っています。子どもたちの居場所って、一番は家族と一緒に過ごす家であり、毎日通う学校であると思います。自分の小学生時代は、学校から帰って外(遊歩道)にあそびに行くと、必ず誰かがあそんでいて、年上の近所のお姉ちゃんに一輪車の乗り方を毎日教えてもらったり、年齢性別関係なくみんなでドッジボールやフリスビーであそんだりしていました。遊歩道に行けば必ず誰かいる＝今思うと、自分の居場所のひとつのようになっていたように感じます。あとは、自宅の隣が祖父母の家だったので、祖父と一緒にテレビを観たり、祖母のつくっている夜ご飯をつまみ食いしたり、自宅で叱られて落ち込んでいる時は祖父母の家で慰めてもらったりしていたそんな記憶があります。祖父母の家も自分にとって安心できる居場所でした。今の小学生の子どもたちには、どのくらい“居場所”があるのかな…？と考えると、核家族世帯が増えている現状や、全員ではないにしても、小さな時から習い事等に忙しく誰かとゆっくりあそぶという時間が少なくなっているであろうということを踏まえると、やはり子どもたちの居場所って少なくなっているのかなと実感しました。“学童保育で育つ良さ”というのはたくさんあるけれど、子どもたちにとって、頼れる存在が増える、常に誰かが側にいてくれるという安心感、ひとりではできない体験や感じることができない思いをたくさん経験できる、という部分が特に大切なのかなと感じています。自分自身にとっても実は居場所とさせてもらっている学童保育所という存在が、ひとりひとりの子どもたちにとって安心できる居場所となるようにこれからも頑張っていきたいなと改めて感じました。

全体会のお話。玉木先生が、なかなか言いづらいようなこともストレートにお話してくださってとて

も興味深くきかせて頂きました。「生まれた時の体のできで性別を決め、生き方を決められていくという不平等な考え方」というお言葉をお聞きして、確かにと感じました。昔話の典型文ともいえる、おじいさんは山へ芝刈りに、おばあさんは川へ洗濯にという一文。これを何の疑問ももたず当たり前だと思って生きてきてしまっているよなと感じました。世の中には、だいぶ少なくなってきたにせよ、「男性は男性らしく」、「女性は女性らしく」というような考え方がやっぱり残っていると思うし、自分自身も、今回のテーマ【セックスとジェンダーについて考えよう】を“言いづらいこと”と思ってしまっていたことそのものが、生きづらい世の中にさせてしまっているのだなと実感しました。研修の中でもよく、“あなたはあなたのままでいいんだよ”ということを子どもたちに伝えていくことが大切と学んでいるように、身体と心の違和感や、男性らしさ女性らしさという固定概念への違和感をもし子どもたちが感じた時に、打ち明けることのできる身近な大人の存在が重要になってくるのかなと感じました。少し違うことかもしれないけれど、例えば「え～〇年生なのにまだアンパンマンが好きなの？！」というような子どもの言葉を耳にすることがあります。そんな時、「誰が何を好きでもいいんだよ。何を好きなのかはその人の自由だよ」と伝えるようにしています。このように、「好きなものに対してそれを否定されない経験」、「好きなものを好きと自信をもって貫き通すことができる経験」を積み重ねていくことが、世の中が少しずつ変わっていくための本当に小さな第一歩なのかなと感じました。玉木先生が仰っていたように、今男の子のプリキュアが出てきたり、男性同士の恋愛を描くドラマがあったり、働く女の子のアニメが出てきたり。ランドセルの色が、男の子は黒、女の子は赤、という概念ではなくなってきつつあったり。少しずつ世の中がみんなが生きやすい世の中に変わりつつあることを気付かせて頂きました。今回のテーマに“多様性”とあるように、どんな自分であっても受け入れてもらえるという安心感をまずは目の前の子どもたちに与えていきたいです。自分の中の固定概念だけに縛られることなく、“そういう考え方もあるんだ”、“そういうカタチもあるんだ”というように、知ろうとする姿勢を大切にしていきたいなと感じました。

分科会のお話。西川先生の「実は子どもだけでなく、大人たちも変わっていっているんだよ」というお言葉にハッとしました。子どもたちだけでなく、私たち大人も、スマートフォンがもし生活の中からなくなってしまったらすごく生きづらいし、きっと不安になってしまう人も多いのではないかなと感じます。学童にお母さんと一緒にお迎えに来る小さな弟くん妹ちゃんたちも、スマートフォンを片手に動画を観ていることが多いです。私の祖母もそれなりにスマートフォンを使いこなしていて、電話を掛けてきてくれます。今や、どの世代においてもスマートフォンを始め、デジタル媒体はなくてはならないものとなっているのだなと改めて実感しました。今の子どもたちの特徴として、「SNS で自分の姿を加工しまくっている。そのため、本当の姿やありのままの姿をさらすのが怖い」「早い、便利、無駄がない、というのが大切だと思っている」「バーチャルの世界の中で、友達や兄弟をつくっている」等が挙げられていました。ありのままの姿を見せることができないことは、いつかしんどくなってきてしまうだろうなと感じます。失敗しても大丈夫、カッコ悪くても大丈夫、いわゆる“いい子”じゃなくても大丈夫、1 年生だろうが 6 年生だろうが甘えたって大丈夫なんだよ、ということを伝えていきたいし、子どもたちが無邪気に笑ったり、力いっぱい怒ったり泣いたり、甘えたり反抗したりしながら、子どもたちひとりひとりが自分の感情に常に正直でいられる空間にしていきたいと感じました。「無駄がないということが大切だと思っている」というお言葉も衝撃でした。大人になるとその考え方は大切だけど、子ども時代に無駄なことなんてないと思います。どんな経験も無駄と思わず、子どもたちが心から楽し

むことができるように、そして一緒に隣で全力で楽しむことのできる大人でありたいです。加えて、バーチャルな世界が確立されていて、リアルな世界での人と人との関わりが薄れてしまっている子どもたちもたくさんいることを知り驚きました。寂しいなとも感じました。「子どもたちは現実の世界で足りていないものを補うためにネットの世界にいくことが多い」というお言葉はハッとさせられました。ネットの世界は、当たり前に子どもたちの中にも存在しているものであり、しかも危険や恐怖等悪い要素ばかりではないと思います。楽しいし便利だから、正しい目的と頻度で使用すればいいのかなと思います。でも、のめりこみすぎてしまう子どもも多い現状の中に、現実の世界がそれなりに充実していればそこまでのめりこみすぎてしまうこともないのかもしれないとも思いました。子どもたちにとって少しでも現実の世界が充実するために私たちがお手伝いできることは何か？「子どもたちを褒める時は褒めるし叱る時は叱る。真っすぐに向き合うことで、子どもたちにとって大人が、安心して甘えたり頼ったり反抗したりできる存在になること」、「毎日頑張っている子どもたちにとって少しでも体と心を休めることのできる環境となるようにすること」、「やってみたい！という意欲と、喜怒哀楽を感じることを少しでも多く経験させてあげること」を意識していきたいなと感じました。現実の世界で人と人とが繋がり合うことのできる貴重な機会である学童での生活。現実世界で人と人とが向き合うからこそ感じる人の温もりの安心感や、目を見て言われる“ありがとう”の嬉しさ等、これからも大切にしていきたいなと感じました。

　今回も実りある時間をありがとうございました。

※提出されたレポートは、当会の広報誌やホームページに掲載する場合もありますので、あらかじめご了承ください。

※〆切は、6/18（日）です。常勤専任指導員に手渡し、または okazakigakudou@yahoo.co.jp までお送りください。